

鈴木 照代の一代記

2026年

第一章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

秋田の横手は雪の深い盆地の町だった。冬になると屋根まで雪が積もり、外に出るには長靴ではなく鉄砲長靴が必要だった。私が生まれたのは昭和二十九年で、戦後の傷跡がまだ残っていた頃だ。父は農業をしながら出稼ぎにも出た。冬の間は家にいないことも多く、子どものころの父の記憶は少ない。

母は強い人だった。父がいない冬の間、田んぼの管理から子育てまで一人でこなした。文句を言うのを聞いたことがない。「弱音を吐いても雪は減らない」というのが母の口癖だった。私はそれを笑いながら聞いていたが、その言葉が染み込んでいたのは確かだ。苦しいことがあっても笑い飛ばす癖は、母から受け継いだと思っている。

四人きょうだいの二番目で、兄と二人の妹がいた。農繁期には子どもたちも手伝った。田植えの時期になると、小学生でも泥んこになって田んぼに入った。冷たい水に足を入れると最初は息が止まりそうになるが、慣れると

気持ちよかった。夏祭りの屋台、冬の雪まつり、季節ごとの行事が子どもの世界を彩っていた。

学校は好きだったが、進学についてはあまり考えたことがなかった。家の事情を考えれば、中学を出たら働くのが自然な流れだった。そのことを特別につらいとは思っていなかった。あの頃の横手では、それは珍しいことではなかったから。ただ、本屋の店先で読めなかった本を何冊も眺めながら、いつか読みたいと思っていた。



※実際の本には、ご本人やご家族の写真が入ります。

雪の駅で旅立つ若者たちのイメージ

第二章 学生時代

(12～22歳ごろ)

中学三年の秋、担任の先生から「東京の工場で働く口がある」という話を聞いた。集団就職の列車に乗ることになったのはそれから半年後のことだ。十五歳の春、横手の駅に同じ行き先の子どもたちが集まった。泣いている子もいたが、私は泣かなかった。泣いたら母に申し訳ない気がしたのと、怖いよりも新しいものへの好奇心の方が強かった。

東京の電機部品工場に配属された。寮は相部屋で、秋田からの同郷の子と同じ部屋になった。お互いの訛りで秋田弁でしゃべると、少し気が楽になった。仕事は単純作業の繰り返しで、最初は指が痛くなるほどだったが、一か月で慣れた。ラインの流れるスピードに体が合ってくると、ものを作り出す達成感があった。

休みの日には寮の仲間と東京見物に出かけた。浅草や上野、銀座の明るさに目を丸くした。秋田では想像もできなかった賑わいだった。給料をもらうたびに少しずつ貯

金し、残りで映画を見たり、故郷への仕送りをした。月に一度届く母からの手紙が、何より楽しみだった。鉛筆で書いた丸い文字が、横手の畦道を思い出させた。

サンプル — 実際の本は、ご本人のお話からAIが文章を生成します

実際の本は全6章構成です

第1章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

第2章 学生時代

(12～22歳ごろ)

第3章 仕事・青年期

(20～40歳ごろ)

第4章 恋愛・結婚

第5章 子育て・家族

第6章 今の思い・家族へのメッセージ

(現在)

このサンプルは第1章・第2章のみ収録しています。